

文学博士武田祐吉君の「萬葉集校定の研究ならびにその萬葉学に

おける業績」に対する授賞審査要旨

本書は、校定による萬葉集の原形への復帰を論じたもので、序説および本文四章から成つてゐる。

序説は、「古典の成立とその伝来」と題し、一般の古典が成立の後、伝来の際に原形を毀損するものが多いことを説き、その原形への復帰の必要と、その方法としての校定事業とを論じ、古典の一なる萬葉集の場合について、同じく校定を要する事情を説明している。萬葉集の校定を論述しようとして、まず萬葉集を含む一般の古典についてこれを述べ、以て本論の準備としたのである。

本文第一章は、「萬葉集の成立」と題し、萬葉集の校定の目標である原形について論述している。萬葉集の編者が編纂に際してその有していた資料と、どのような態度で使用したかを考察し、部類、形態、文字等の各方面から卷ごとに特色があり、また卷中においても集団別に特色のあることを明らかにし、これをその資料から持ち越したものであるとなし、萬葉集は、種々の方面から見ても不統一性の多い歌集であることを明らかにした。

第二章は、「萬葉集の文字」と題し、校定の対象である萬葉集の文字について考察し、萬葉集の歌謡における国語の表示は、必ずしも純粹なる音声の描写ではないことを明かにした。この方面の研究は、校定事業のうち、特に訓の決定に當つてその基準となるべきものである。

第三章は、「萬葉集の伝来」と題し、伝来の歴史的考察ならびに伝来した現状について記述している。これは萬葉集

校定の必要性を説き、その資料の性質を明らかにする意味においてなされたものである。ここでは萬葉集のあらゆる伝本についてその系統を論じ、その性質を述べている。

第四章は、「萬葉集の校定」と題し、校定の方法について論述している。従来の校定の事業が、多くはその校定資料の批判を欠いていたが、本書は、校定資料の批判の重要であることを論じ、また校定事業の実際について、考察を試みたものである。

以上、章を分つて、萬葉集校定の必要を説き、その目標とすべき原形を論じ、校定の資料および方法について記述されている。

この書の研究において、学界今日までの成果が利用しつくされておらず、かつ、部分的には首肯されない点もある。しかしながら、この書は、著者が、萬葉集の校定作業に理論的根拠を與えようと努力し、組織的に論述したものであつて、この方面におけるかような体系的な著述は、従来の萬葉研究には無かつた。この書の意義はその点に存するのであつて、萬葉学の将来の体系づけの上に寄與するところがあると認められる。

著者は、「校本萬葉集」「定本萬葉集」の編者の一人として、萬葉集の校定に従事すること多年、「上代国文学の研究」「萬葉集書志」「国文学研究萬葉集編」「同柿本人麿呂攷」等を著し、著作に、教導に、萬葉学に貢献するところが尠くなす。